

《論文》

主体と欲動

片 山 文 保

〈要旨〉そもそも精神病・神経症などの心の病の解明努力から始まった精神分析は、人間存在をそのすべての活動の動因としての構造的な欲望に基づいて捉えようとする点において、その姿勢は本質的に倫理的である。つまり、その目標とするところは、精神の真実としての「構造」に基づいた人間本来の在り方、生き方への示唆である。本稿は、この観点から、ラカンの理論を倫理的な思想として捉え、精神分析的観点による主体と生物学的な由来を持つ欲動との関係の諸議論の検討を通して、我々自我主体が如何にあるべきかを考察する。

I. 主体の分割と表象の代理としての S_2

この論考を始めるに当たって、まず、ラカンの著作 *Séminaire XI Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse* で扱われる様々な論点のうち、特に、本稿が全体にわたって参照するものとして、いわゆる「主体の分割 *division du sujet*」が論じられている箇所をここに示し、そこに含まれているいくつかの主題を大まかにまとめておこう。

[...] le premier couplage signifiant, qui nous permet de concevoir que le sujet apparaît d'abord dans l'Autre en tant que le premier signifiant, le signifiant unaire, surgit au champ de l'Autre et qu'il représente, comme tel, le sujet, pour un autre signifiant. Lequel autre signifiant a pour effet *l'aphanisis* du sujet, division du sujet pour autant que le sujet apparaît quelque part, comme sens, ailleurs il se manifeste comme fading, comme disparition.

C'est donc, si l'on peut dire, une affaire de vie et de mort, entre le signifiant unaire et ce sujet en tant que signifiant binaire, c'est la cause de sa disparition. Le *Vorstellungsrepräsentanz*, c'est ce signifiant binaire.¹⁾

拙訳：[...] 最初のシニフィアン結合 $[S_1-S_2]$ によって、わたしたちは以下のように考えることができます。すなわち、第一のシニフィアン、つまり単項シニフィアン $[S_1]$ が「他者」の領野 *champ de l'Autre* に生じる限りにおいて、主体は、まず、「他者 *Autre*」²⁾ において現れます。そして、この第一のシニフィアンは、そのものとして、主体を、もう一つのシニフィアン $[S_2]$ に対して表象する représenter のです。このもう一つのシニフィアンが、結果として、主体の

隠滅 *aphanisis*、主体の分割をもたらすのです。つまり、主体はどこかに「他者」の領野に意味 *sens* として現れるのですが、他のところ [A、「無意味 *le non-sens*」³⁾] では、主体は消滅 *fading* として、消失 *disparition* として己を示すということです。

これは、従って、こう言ってよければ、単項シニフィアンと、この、二項シニフィアン *signifiant binaire* としての主体の間の、生と死の問題なのです。これは主体の消失の原因 *cause* です。表象の代理 *Vorstellungsrepräsentanz* とは、この二項シニフィアンのことなのです。

もう一つ、この主体の分割という問題に関して、同じ S. XI から引こう。上の引用文にある *aphanisis* というギリシア語は、ラカンによれば、E. Jones がシニフィアンと主体の関係を捉えるために「別の水準において」「発明した」ものらしいが、この語について、ラカンは、Jones がそれを用いた水準とは別の水準に適用することで、シニフィアンと主体の関係を「もっと根源的なやり方で位置付けなければならない」と言う。そして、この語を、主体の「他者」の領野との出逢いの水準に適用して、次のように言う。

[...] le sujet, dans son champ de sujet, se manifeste dans ce mouvement d'*aphanisis* que j'ai appelé létal, et d'une autre façon, en un point, moi-même, le *fading* du sujet. (242)

拙訳：主体は、その主体の領野 [「他者 *Autre*」の領野] において、致命的 *létal* と私が呼んだあの隠滅 *aphanisis* の運動において自己を示すのですが、また、もうひとつ別の *autre* 仕方、ある点において、すなわち、私自身ですが、主体の消滅 *fading* において、自己を示すのです。

以上、二つの引用箇所について検討を加えよう。二つとも、例によって、多義性を含んだ表現がされている箇所だが、我々はこれらのくだりを次のように理解しよう。

すなわち、主体の分割においてポイントになるのは、この事態が主体における「*aphanisis* 隠滅」であり、「*fading* 消滅」であり、そしてまた「*disparition* 消失」であるということだろう。これら三つの語はすべて基本的に同じ事態を指しているだろう。すなわち、主体の「他者 *Autre*」との出逢いにおける、本来的な主体の死の場への消失と、そして、この喪失において死を被った自我主体の誕生である。三つの語は、この事態の全体としての、主体の、分割における誕生を指すと同時に、その各局面をも指す。各局面が全体を表すからである。主体の一部分の消失は、自我主体における消失であり、そしてまた、全一として実現されるはずだった主体の消失でもある。要するに、問題は欠如である。

「他者 *Autre*」との出逢いにおいて、主体は、それまで何ものでもなかったものから、何ものかとして誕生するのだが、この誕生は飽くまでも、本来的なものを失った、シニフィアンの中への凝固であり、いわば、凝固における誕生、死における誕生、死という欠如を負った誕生である（「凝固する *se figer*」とは、本来的何ものかを、例えば、不死の生命、あるいは「存在」を、すなわち、本来的な享樂を失うことである。この失われたものが装う本来性が、ラカンの言う「疎外 *aliénation*」、すなわち、ナルシシックな主体がその欲望において悩まされる疎外の実体である）。ラカンの言葉を借りれば、この誕生は「消えゆく現れ *apparition évanouissante*」(40) である。つまり、それは、同時に消失を被った出現、同時に不在を被ることとしての存在の誕生、隠れるという

運動を含んだ現れの運動のことである。

こうして、本来的な主体の隠滅は、自我主体における消失であり、そのような自我主体は消滅において在る、そして、このような分割の事態そのものが、全的であるはずだった主体の消失、隠滅、消滅なのである。

これらの引用文について我々が特に問題にすることは、この主体の分割の他に、もう一つある。それは、一つ目の引用の末尾の文に見られる、「表象の代理 *Vorstellungsrepräsentanz*」としての「二項シニフィアン *signifiant binaire*」である。

この「表象の代理」について、ラカンは、フロイトの言う *Vorstellungsrepräsentanz* とは、人はこれを「表象的代理 *représentant représentatif*」(つまり、ある表象が欲動の代理になっているとされる際の、その表象 - 代理) と訳しているのだが、そうではなく、「表象の代理 (代わり) *tenant-lieu de la représentation*」なのだと言う (71) (ラカンはこのフロイトの用語を、通常、「表象の代理 / 代表 *représentant de la représentation*」と訳している。訳語は変わらないが、ラカンの用いる語が異なる)。

ラカンが言うとおり、例えば、Laplanche-Pontalis の『精神分析用語辞典』⁴⁾ では「表象代表、表象代理 *représentant-représentation*」と訳されている。つまり、それ自体ひとつの表象であるところの (欲動の) 代理という意味である。そして、この辞典の著者は、当該項目の注において、ラカンの名は挙げてはいないが、おそらくラカンのことを念頭に、「表象の代理 *représentant de la représentation*」という訳語について、「フロイトの考え方から外れることになる」と批判している。「[問題の] 表象は欲動を表現するものであり、それ自体は他のものによって表現されうるようなものではない」のだと。

問題は、フロイトの言う、原抑圧の場合をも含めた、抑圧されたものとしての *Vorstellungsrepräsentanz* が、具体的な某かの表象であるか、それとも、シニフィアンであるかということである。ラカンがそれを二項シニフィアンというシニフィアンとして捉えていることは、上の一つ目の引用の最後の文で明確に分かる。

しかし、抑圧されているものが、欲動の代理としての何か具体的な個別の表象であるという考え方、もっと正確に言えば、個々の表象自体がそこに欲動が固着する代理になるという考え方が、フロイトの理論自体に矛盾することは、むしろ見易いことだろう。夢の解釈においてフロイトが発見したのは、無意識的な欲望 *Wunsch* が、複数の個別の表象を繋いでそれらの間を通していくという、移動と圧縮の事実だったことはよく知られていることだが、その移動・圧縮は、一見、表象同士の間で起きているように見えながら、現実には表象を構成する些細なシニフィアン同士の間で起きているということこそ、フロイトが示そうとしたことだっただろう。抑圧されているものが個別の表象であるように見える場合にも、現実には抑圧されているのはその表象におけるシニフィアンだろう。従って、この問題はこれ以上特に論うこともないだろう⁵⁾。

Vorstellungsrepräsentanz を「表象の代理」と訳すことの問題、あるいは論点は、別の点にあるだろう。それは「表象 *représentation*」にある。上の一つ目の引用に見られるとおり、ラカンは、主体の分割における二つのシニフィアンの間で、主体の表象化作用が生じているとしているのである (下線部)。

ここで、先に進む前に、ひとつ断っておきたいことがある。ラカンは「表象の代理」とは二項

シニフィアンのことだと言うのだが、この単数形で表記される「二項シニフィアン le signifiant binaire」とは S_2 のことである。我々はこの S_2 を、必要に応じて、 S_1 - S_2 、あるいは、 (S_1-) S_2 と表記しよう。 S_1 は S_2 の水準から、すなわち、「他者 Autre」の領野から落下・消失した、絶対的に単独の「単項シニフィアン le signifiant unaire」だが、 S_2 は飽くまでも S_1 と連鎖を成すという点において単項ではない。絶対的に孤立した S_1 と「連鎖を成す」という言い方は、確かに奇妙である。しかし、 S_2 は S_2 水準上にない S_1 と結合することによってしか、あるいは、もっと正確に言えば、 S_1 と結合して S_1 を原抑圧することによってしか、そこに S_2 としては在り得ないのである（つまり、この場合の結合とは、原抑圧するものとされるものとの間の抑圧関係のことである。そして、抑圧関係は水準差を含む）。要するに、問題は、彼岸に、超越の次元に外在する ex-sister ものとの繋がりを、どう表現すればよいのかということである。 (S_1-) S_2 と表記しようというのはそういう意味である。従って、 S_2 が問題にされるときには、必ず、水準差を超えた背後に S_1 との繋がりが隠されていることを承知しておく必要がある（この繋がりが、両者のナルシシクなすり替えを可能にするのだろう）。

それでは、主体の表象ということに注目しながら検討を続けよう。ラカン、当該セミネールにおいて、フロイトが「快感原則の彼岸」において扱った一歳半の男児の糸巻き遊びについて論じている。この子どもは、紐をつけた糸巻きを、ベッドの枠越しに、ベッドの中に投げ込んで「あっち fort!」（実際には、この語の母音の o、o）と叫び、そしてまた、紐を引いてベッドから引き出して「こっち da!」と叫ぶことを何度も繰り返すのだが、ラカンはこの言葉と行為について、この糸巻きにこそ主体を指示し désigner しなければならないと、そして、この糸巻きに a という名を与えと言う (73)。

a は、投げられた糸巻きがベッドの枠（いわゆる「枠 cadre」）の中に隠れている限りにおいて、この糸巻きに担われてそこに在る。fort-da は、「音素上の対立 oppositions phonématiques」によって現れる、「主体の最初の印のひとつ une des premières marques du sujet」として、この主体の「表象 représentation」の「代理 représentant」になっている。そして、この主体の表象（すなわち、分割）において、主体は、a を中枢としたまったく新たな意味領野に（あるいは、その新たな意味領野として）、すなわち S として誕生する。すなわち、この遊びを通して、子どもは自己を、不在がちな母から切断された一つの主体 S として受容するに至るのである。

そして、ラカンは次のように言う。

[...] ce qu'il vise, c'est ce qui essentiellement n'est pas là en tant que terme représenté, car c'est le jeu qui est le Représentanz de la Vorstellung (74)。

拙訳：[...] この遊びが狙いとしている [fort-da が代理している] のは、表象された項（境界標）terme représenté [失われた部分主体 a] として、本質的に、そこにはないものです。なぜなら、この遊びこそ表象の代理であるからです。

先に、我々は、主体の分割を、「他者」の領野との出逢いにおいて、主体が、失われた主体部分 a と、自我に同一化する意味的主体 S に分割されることとして理解した。二項シニフィアン、すなわち、 (S_1-) S_2 の機能は、主体の分割における部分主体の分離なのだが、この機能は、まったく同時に、

その失われた部分主体 a の表象作用でもある。すなわち、主体の分割と表象とは、同一事象の二面である。そして、この表象化の作用において重要なことは、結果としての表象には問題の主体がいつも欠けているということである。

主体の表象は、結局、いつも失敗に終わるのであり、その意味において、そこには主体の表象はなく、主体の表象の代理・代表としてのシニフィアン結合 (S_1 -) S_2 しか存在しない。すなわち、「他者」の領野 *champ de l'Autre* には、 S_1 の場から、主体の表象の代わりに、代理の S_2 しか送られてこないのである。つまり、上の引用文中の「表象された項 (境界標) *terme représenté*」は、確かに表象はされたが結果的に得られた表象から抜け落ちた項、という意味である。

表象、あるいは、表象化作用を意味する *représentation* には、「代表行為」の意味もある。この場合、*Vorstellungsrepräsentanz*、すなわち、「表象の代理 *représentant de la représentation*」とは、主体を代表 (表象) する代表 (表象) 行為におけるその代表 (表象) の意味になる。先に取り挙げた『精神分析用語辞典』の当該項の一つ前の項「表象」を見ると、「表象 *Vorstellung, représentation*」は、哲学・心理学で一般的に用いられている語であり、「とりわけ過去の知覚の再現」を示すほか、「思考行為の具体的内容をなすもの」を示すと、冒頭で概説されている (辞典の著者は哲学用語辞典から引いている)。つまり、「表象」という語には、具体的思考内容の意味がある。つまり、思考するとは、表象すること、すなわち、主体を表象することである。思考するということが言語による行為、すなわち、シニフィアンによる行為である限り、それは、必然的に、 S_1 - S_2 を介するのである。従って、思考内容としての「表象 *Vorstellung*」とは、思考が欲動・欲望の営みである以上、主体の表象のことである。ラカンとは、フロイトの言う「表象」を、その意味において捉えているのである。これを更に一般化して、表象という行為が某かのシニフィアンを用いる行為である限り、それは、主体を表象しようとする表象行為であると言えるだろう。これは、そもそも、欲動というものが、(S_1 -) S_2 における主体の表象のことだということである。そして、当然、その結果としての表象には主体が欠けているのである (この意味で、いわゆる主体の分割は、原初的なそれのみでなく、表象行為の度に生じている)。

以上のことを踏まえて、この S_2 について、もう少し検討を続けよう。原抑圧との関係において、ラカンは S_2 について次のように言う。

Comment est-il [= le signifiant binaire] mis en cause, comment vient-il à constituer le point central de l'Urverdrängung, de ce qui, à être passé dans l'inconscient, sera, comme Freud l'indique dans sa théorie, le point d'Anziehung, le point d'attrait, par où seront possibles tous les autres refoulements, tous les autres passages similaires, au lieu de l'unterdrückt, (ce qui est passé en dessous, comme signifiant). (257-258)

拙訳：二項シニフィアンはどのように問題になるのでしょうか、どのようにして原抑圧の中心点 *point central* となる、つまり、無意識 [裂開、 \mathbb{A}] の中へと移行したために、F がその理論の中で示すように、魅惑点 *le point d'Anziehung, le point d'attrait* となるもの [S_1] の、その中心点となるのでしょうか——この魅惑点を介して、禁圧されたもの *l'unterdrückt* (下部に、シニフィアンとして移行したもの [S_2]) の場所への、他のあらゆる抑圧、他のあらゆる [相互に] 類似的な移行が可能になるのです。

ここで参考にするべきは Fig. XV-2 だろう。S₁-S₂ というシニフィアン結合において、S₁ は S₂ によって原抑圧される。つまり、S₁-S₂ が根源的な無意識 A を制定する（図では、A は、S₁ と S₂ の間を二つの水準に仕切る縦の境界・限界線を基準にして、その左側の領域に相当する。この縦の限界線は、それが S₁-S₂ という結合によって生じた以上、S₁-S₂ の価値を持つ）のであり、この制定において、それと同時に、つまり、それと同義に、S₁ がこの A の水準に落ちる、あるいは、落下する S₁ がこの A という場を拓く、あるいは、その意味において、S₁ が S₂ 水準における欠如 A になるのである。（S₁-S₂ が A を制定したということは、この「二項シニフィアン」である S₂ が、ラカンの言う S(A) であるということである（つまり、我々の表記 (S₁-)S₂ は S(A) を書き換えたものである）。

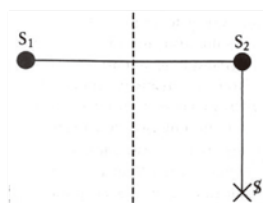


Fig. XV-2, p. 233

S₁ は、こうして根源的な無意識 A の中へと移行して、「魅惑点 point d'Anziehung, point d'attrait」となり、S₂ はこの S₁ の「原抑圧の中心点」になる。S₁ は「魅惑点」として機能し、他のシニフィアンを惹きつけて S₂ の場・水準に禁圧するのだが、この「禁圧された unterdrückt」諸々のシニフィアンは、図の S₂ からその水準上に X まで続く直線をなすだろう。この直線上に並ぶであろう諸々のシニフィアン S_n は、それらを惹きつけた S₁ と結合して、一般に S₁-S₂ と表記できる互いに類似した諸々のシニフィアン結合を成す（S₁-S₂ の「-」は「魅惑 attrait」の「線 trait」である）。つまり、S₂ は、これら諸々のシニフィアン S_n の中心であり、そして、意識的なすべてのシニフィアンが、抑圧されたシニフィアンとの繋がりにおいて存在するのであれば、S₂ はシニフィアン網全体の中心であり、さらに、このシニフィアン網の全体が、それ自体が S₂ を中心にして S₁ を原抑圧することによってそこに在るのであれば、S₂ はシニフィアン網全体による S₁ の原抑圧の中心点である。

二項シニフィアン S₂ は「禁圧される unterdrückt」のである。つまり、S₁ が落ちると同時に、その繋がりにおいてそれ自体が禁圧されることによって、同様に S₁ との関係において禁圧されるシニフィアンの場を、すなわち、意識の「下部 dessous」である、いわゆる前意識の水準を形成するのである。言い換えれば、S₂ は、禁圧された最初のシニフィアンとなることで、同様に抑圧・禁圧された他のシニフィアンがそこに位置付けられるような場・水準になる。つまり、S₂ は事後抑圧の場としての前意識になるだろう。この意味で、S₁-S₂ は根源的な無意識と意識という二つの相互に対立する領域を制定すると同時に、S₁ が魅惑点に、そして、S₂ が抑圧・禁圧されたものの場となることによって、抑圧・禁圧の機制を制定する。こうして、他の抑圧・禁圧されたシニフィアンは、第二、第三…の S₂ になる。そして、この一般的 S₂ は、S₁ との結合において知を成すことになる。つまり、S₂ は知一般であると同時に、知一般が位置付けられる場である。その意味において、場としての S₂ は「他者 Autre」のことである。A はこの「他者 Autre」における欠如であるが、この欠如を成すもの、すなわち、A の棒線「/」（「棒線 barre」）として表記されるものは、S₂ の水準から落

下した S_1 である。 A が「他者 Autre」における欠如そのもの（すなわち「根源的他者 Autre radical」）を示すとすれば、 A とは S_1 のことである。

S_1 は「魅惑点 le point d'attrait」と呼ばれるのだが、この「魅惑 attrait」、すなわち、魅了し惹きつける *attirer* ものというのは、当然、ラカンが a について、「視線 regard」について、言うところの「魅惑 fascination」、あるいは、「魔法 fascinum」を示唆しているだろう。シニフィアンとの最初の邂逅において、すなわち、 S_1 から S_2 への表象において、主体は「凝固する se figer」、つまり、運動を止められ、ある意味において死を被る。つまり、自己の本来の部分を使い、生／死において誕生するが、その失われた本来的な部分主体は、いわば、 S_1 とともに落下するのである。そうして、 S_1 が「魅惑点」として機能する、すなわち、 S_1 の落下した A をその場として（落下した S_1 の場である A の代理として） a が機能する、言い換えれば、欲動が蠢く、つまり、欲動が a を巡る周回運動をすることになる。そこに a が浮上し機能するときには、二項シニフィアン S_2 が S_1 の「中心点」として、つまり、欲動の代表として機能している（この意味において、 S_1 は欲動の原点であり、 S_1 - S_2 は欲動の源泉、すなわち、そこから欲動が湧き出る口、淵の縁である）。そして、その限りにおいて、そのとき S_2 の場にある某かのシニフィアンは、事後抑圧の引力・圧力下にあることになる。

II. 主体と欲動

ラカンは S.XI において、「ラメラ lamelle」という自前の神話を導入している (232)。これについては、すでに別の拙論（「自我と欲動」⁶⁾）で不十分ながらも扱っているので、ここでは詳しくは繰り返さないが、ラメラの意味するものについて、以下に簡潔に触れておきたい。まず、ラメラ神話なるものから窺えることを、それと深く関連する主体の分割ということに照らし合わせながら見ておこう。

ラカンによれば、人間は欲動的な欠如を負って生まれてくる。この欠如の出現は、生物の歴史において有性生殖が発生した時点まで遡ることが出来る。このとき、生物個体は、もともと個体のものであった不死の生を使い、新たに、死と同時に性的な欲動を負うことになった。つまり、不死の生が欠けたその死の場に、性欲動が死と一体となって位置付けられることになったのである。人間が負って生まれてくるのも、それと同じ意味で、死と性欲動の場としての欠如である。この欲動的な欠如がラメラである。

人間は、生まれながらにして、このような欲動的欠如を負った個体主体であるが、シニフィアンとの邂逅において、この欠如を負った主体というあり方が、 a を負った S という形で制定されることになる（「主体の分割」）。つまり、意味としての主体と欲動的欠如である。意味としての主体とは、分割によって誕生した S が、意味的存在としての自我に同一化した在り方である。主体 S が自我という形成物に陣取り、自己を自我として捉え生きるのである。他方、この S から分離された a は、主体から失われた自己部分、すなわち、かつて、有性生殖の到来において失われた不死の生のように、本来、主体のものであったはずの、失われた、いわば分身である。欲動はこの喪失された部分主体としての a を巡って生じる。

S は、自我の中に陣取りながら、普段からこの a の影響下に生きている。つまり、主体は、その

欲動的欠如を負った宿命から抜け出すことが出来ない。意味に生きる主体にとって、あらゆる対象、出来事、経験が、a を中枢として、a を基準として意味づけられているのである。

欲動的欠如としてのラメラは欲動自体でもある。無意識における欲動ラメラは、失われた自己部分（主体の分割においてそのものとして、すなわち「対象 a」として制定され、個体の歴史の内外を問わぬ喪失体験の一切が、すなわち、有性生殖の発生による、個体における死の到来としての不死の生の喪失から、誕生以降の、特に幼児期における様々な喪失体験に至るすべてが、その等価物になる、そのような自己部分）を巡るところの、フロイトが「部分欲動」と呼ぶ欲動である。ラカンが、欲動は、本質的に、そのような意味における、つまり、喪失された自己部分を巡る、そして、それを周回してもとに戻るところの部分欲動であると言う。欲動が周回するとは、a を巡る周回のことである。Fig. XIV-1 に見られるように、「縁 Bord」から出発して a を周回し、そしてまた縁に戻る。そして、またこの周回を反復するのである。

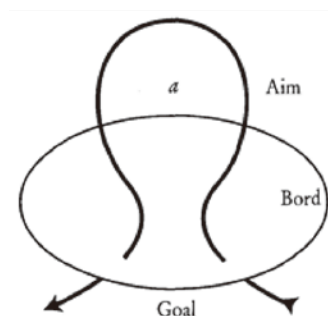


Fig. XIV-1, p. 208

つまり、これは性的欲動 *pulsion sexuelle* なのだが、ここで「性的 *sexuel*」とは、官能的 *erotique* の意味であって、性別的 *sexué*、あるいは、生殖的 *génital* の意味ではない（ラカンは、生殖欲動なるものは存在しないと言う）。このことは、実際に、人間の性行動が、必ずしも、性別や生殖に拘らないという事実に現れている。また、ラカンは、この部分欲動としてのラメラのことを「純粋な、不死の生の本能 *pur instinct de vie [...] immortelle*」(233) であると言うが、これは、有性生殖をするために不死の生を失った生物である人間において、主体の分割という特異な体験を介して到来したところの、その本質を部分欲動とするこの欲動が、いわば、生殖から再び解放されたその官能性（すなわち享楽）において、無性生殖における不死の生の本能を、その純粋な形において蘇らせた、という意味ではないだろうか。

人間において、欲動が生殖欲動ではなく、部分欲動として a を反復的に周回するということは、人間における性欲動の本質が、このように主体の分割に結びついている点にあることを示している。ラメラとは、このような部分欲動としての性欲動のことである。

次いで、ラメラが身体を介して主体とどのような関わりを持つか見てみよう。ラカンは、ラメラは実在しない「器官 *organe*」であると言う。それは、欲動的欠如という、まず身体において、そしてシニフィアンによって制定される器官である。この点について、まず、ラカンの文言を引用する。

Cette sorte de corps de lamelle, avec son insertion quelque part, car cette lamelle, elle a un

bord, elle vient s'insérer là où je vous l'ai mis, écrit, au tableau, à savoir, sur la zone érogène, à savoir, sur l'un des orifices du corps, en tant que ces orifices, toute notre expérience, sont liés, à l'ouverture-fermeture de la béance de l'inconscient. (235)

拙訳: ラメラというこの種の物体 corps は、それがどこかに付着することによって、と言うのも、ラメラには縁があり、私が黒板にそのことを示し書いた場所に、すなわち、性感帯に、すなわち、身体開口部の一つにやって来て、そこに付着するからです。これらの身体開口部が我々のどの経験に照らし合わせてみても無意識の裂開の開閉に結びついている限り、そうなのです。

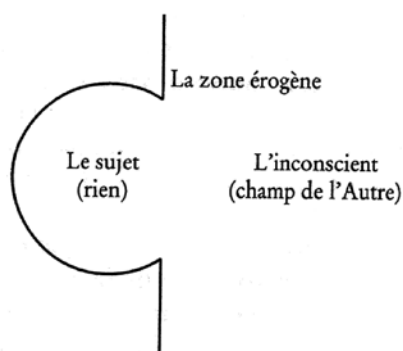
ラメラには縁 bord がある。ラメラは、喪失された主体の自己部分としての欲動的欠如であるから、当該自己部分が欠落した痕跡として、欠如を囲い込む縁構造を持っているだろう。この縁構造が S_1 - S_2 によって分節され制定されることになる。

ラメラが付着しにやって来る「身体開口部 orifice の一つ」とは、ラメラが主体の喪失された本質的な部分を意味するのだから、ここで示唆されているのは、いわゆる男根期に主体がそこに実現され、そして、いずれ去勢されて象徴的な「身体開口部」となるところのファルスだろう。ファルス自体は実際の身体開口部ではないが、身体開口部の象徴、すなわち、 A の象徴を形作るシニフィアンとしての Φ 、つまり、去勢痕を A として制定するシニフィアン結合 S_1 - S_2 の S_1 だろう。そして、去勢者とされる父が S_2 に当たるのだろう。つまり、そこに成立するのは $S(A)$ なのだが、これが、おそらく、自我主体による A の無視によって、ラカンはこのような表記はしないが、 $\Phi(a)$ へとすり替えられるのだろう(転移において、知ではない S_1 が知 S_2 にすり替えられるように。つまり、「他者 Autre」を、ここでは「父」を、すり替えるのである。このことはまた後に触れる)。そして、この $\Phi(a)$ が去勢者としての父に投影されれば、男女における $J\Phi$ (ファルスの享楽) の在り方を示すものになるだろう。まだ、男女間の差を導入する工夫が要るが——工夫というのは、 $\Phi(a)$ の取り方を、男の場合には、特権者として a を囲い込んで独占し、息子に禁ずる、普遍的禁止としての父とし、そして、女の場合には、 a を持っており、娘に与えることが出来るはずの父とするのである。また、この $\Phi(a)$ は $J\Phi$ の在り方だが、 A が無視されないで承認された場合には、当然、 $S(A)$ にもどるだろう。

引用文に戻ろう。失われた、自己に属するはずの自己部分を求める部分欲動としてのラメラ、そして、縁構造を持ったラメラは、同じく縁を持った「身体の開口部(穴) orifice」のその縁 bord である性感帯に、「器官 organe」として「付着 insertion」する(つまり、その縁に付着することで、そこが、いわゆる「性感帯 zone érogène」になる)。そして、無意識もまた縁構造 (S_1 - S_2) を持ったひとつの「裂開 béance」であり、これら縁同士が重なる、すなわち、無意識の S_1 - S_2 が、ラメラが付着した身体開口部の性感帯に重なる、あるいは、付着する、そして、そのことによって、身体開口部はこの無意識の裂開の開閉に結びつけられることになる。つまり、 S_1 - S_2 が性感帯に付着するというのは、前者シニフィアンが後者の身体器官を分節するということだが、これは、もっと正確に言えば、 S_1 - S_2 を (S_1-) S_2 と表記した際の「二項シニフィアン signifiant binaire」としての S_2 が、後者性感帯を象徴することによって $S(A)$ になるということであり、そして、身体の開口部が無意識の裂開の開閉に結びつけられるとは、まず、諸々の身体開口部(口、肛門、性器、目)が、無意識の裂開の、その都度の開きである S_1 - S_2 の浮上において、 a を巡る欲動に支配されることを意味す

るだけでなく、さらに、Fig. XV-1の「主体(無)sujet (rien)」が位置付けられていた場としての一つの身体開口部(ファルス)が、二項シニフィアンとしての S_2 の制定によって、死と一体化した欲動の場である A として制定されること($S(A)$ の成立)を意味する、つまり、有性生殖の発生において、生物は到来した死と表裏一体となった性欲動の場としての根源的な欠如であるラメラを被るのだが、身体の開口部に付着したこの欲動的欠如ラメラが、その身体開口部(穴 orifice)とともに、(S_1 -) S_2 のもとに象徴的に制定されることを意味するだろう。ファルスの S_2 による原抑圧であり、そこに $S(A)$ が成立する。そして、これは男根期においてあらゆる部分欲動の中核となったファルスの去勢であるために、その他の身体開口部もすべてこの去勢における(S_1 -) S_2 に、すなわち、 $S(A)$ に組織化され、そこに制定された「無意識の裂開」 A の開閉に結びつけられることになる。そして、「主体(無)sujet (rien)」は、もはや、 S_1 - S_2 制定以前の身体開口部ではなく、やはり、この $S(A)$ に、すなわち、実在しない「器官 organe」のもとに位置付けられるだろう。そして、新たな S_1 - S_2 の浮上の都度、この主体は、このシニフィアン結合において、その都度、新たな S として誕生すると同時に、他方において、 a を周回する欲動を被るということが繰り返されるだろう。

このように、ラメラとは、部分主体が去勢され、そこに喪われた限りにおける場としての A において、対象 a が欲望の原因として機能するところの、欲動の器官、享楽の器官である。



Le sujet (rien) : 主体(無) La zone érogène : 性感帯
L'inconscient (champ de l'Autre) : 無意識(「他者」の領野)
Fig. XV-1, p. 221

先に、いくつかの水準の異なる「縁 bord」が一つに重なるということを言った。すなわち、身体開口部の縁の「性感帯 zone érogène」に「器官 organe」として「付着 insertion」するラメラの縁と、このラメラを $S(A)$ となって制定する無意識の「裂開 béance」の縁(S_1 - S_2)の、三つの縁である。これら三つの縁は、S. XIにおいてラカンが示す三つの図において、一つに重なるものとして表現されている。つまり、三つの図のうちの二つの縁は、それぞれ、Fig. XV-1では「性感帯 zone érogène」、Fig. XIV-1では「性感縁 bord érogène」と呼ばれており(後者は同時に「性感帯」とも呼ばれている)、最終的に、Fig. XV-2上の S_1 - S_2 に統合される。つまり、 S_1 - S_2 、言い換えれば二項シニフィアン S_2 は、性感帯・性感縁であることになる。二項シニフィアンが欲動の代表と言われる所以である。さらに、これら三つの図は、縁だけでなく「穴 orifice」についても、ひとつの穴を文

脈に応じて、別様に表現しているだろう。つまり、**A**のことである。Fig. XV-1については、形の上で見て取りやすい（ラカンはこの穴状のものを「膀胱 vessie」と呼んでいる）。Fig. XIV-1の欲動周回図においては、ラカンは、「欲動の囊 poche de la pulsion」という表現をもって、どうやら、**a**を周回する欲動の運動線を示しているようなのだが、これは欲動の活動域としての**A**を、欲動の矢印がそこから現れてそこへと戻っていくところのBordと記された縁の上部に、いわば縁付の囊として比喩的に示すものとも言えるだろうが、むしろ、この縁を開口部とするその下部の方が**A**に相当するようにも見える。Fig. XV-2においては、直感的にはわかりにくいかも知れないが、先にも触れたように、縦の破線が S_1 - S_2 の価値を持つことから、その破線の左の、 S_1 が位置付けられる場が穴としての**A**だろう。

これらのことから、Fig. XV-1の「膀胱」における「主体 sujet (無 rien)」が、一般に、**A**における、すなわち、シニフィアンに邂逅する前の、いまだ何ものでもない主体であると見当をつけることが許されるだろう。つまり、ラカンは、シニフィアンとの邂逅における主体について、「それまで、来るべき主体として何ものでもなかったこのものが、シニフィアンにおいて／シニフィアンとして⁷⁾凝固する ceci qui, auparavant, n'était rien, comme sujet à venir, devient, se fige en signifiant」(234)と表現するが、「膀胱」における「主体 sujet (無 rien)」とは、この主体のことだろう。

ラカンは、部分欲動としての欲動の周回図に示されたこと、すなわち、「縁 Bord」(「性感縁 bord érogène」)から出て、対象 **a**を周回した後に、再びその縁へと、それを自らの「目標 cible」として戻って来る欲動の運動について、以下のように言う。

Je pose que c'est par là que le sujet vient, tente à atteindre ce qui est à proprement parler la dimension de l'Autre (avec un grand A). (229)

拙訳：私は、主体が、まさしく「他者 Autre」(**A**は大文字です)の次元であるものに到達しようと試みることになるのは、まさにこのこと〔部分欲動の周回・回帰運動〕によるのであると措定するのです。

このラカンの「措定」は、Fig. XV-1の、「膀胱」と呼ばれるものの図についての、周回図による説明と考えるのが妥当だろう。つまり、前者の図において、「身体開口部 orifice」の中に置かれた「主体 Le sujet (無 rien)」とされるものは、まず、その穴の縁である「性感帯 zone érogène」を介した部分欲動において、いわゆる「自体性愛的な autoérotique」快を得ているのだが、このナルシシクな主体が、図の右側の「「他者」の領野 champ de l'Autre」との邂逅において、いわゆる分割を受けることになるという、本稿の第一章において検討した主体の誕生と分割のことである。しかし、筆者は、ここでは、このラカンの措定を、シニフィアンとの最初の邂逅における分割に留まらず、その原初の分割後の分割をも含むものと解釈したい（換言すれば、欲動周回図は、原初的な主体分割の後の **a**を巡る欲動反復を示すのではなく、主体の分割そのものの反復を示すということである。そして、このことは、Fig. XV-1の「主体 Le sujet (無 rien)」が **a**の実質を成すと解釈することを意味する)。

ここで、まず、Fig. XIV-1の、欲動の **a** 周回運動が意味するものが問題になるのだが、前提しておきたいのは、このラカンの図は、欲動の、部分欲動としての本質である回帰性を表現するための

もの（おそらく、愛、そして、幻想、あるいは、性的倒錯のナルシシクな機制を説明するために）であり、この回帰性の図案化に拘らなければ、別の表現も可能だということである。そこで、欲動の運動 $S_1 \rightarrow S_2$ を、ラカンが主体の分割の議論の中で言うように、主体の「表象 *représentation*」であるとしよう。

すると、こうなる。最初の分割後、 S_1 のもとに残された主体 *sujet* が、シニフィアンとの最初の邂逅におけるように、 S_1 から S_2 へと自己を「表象 *représentation*」しようと試みる（絵画の制作において起きるように）。しかし、その都度、この主体はシニフィアンの中に「凝固する *se figer*」、言い換えれば、 S_2 に到達して表象されるのは意味的主体 $\$$ だけであり、本来的な主体は、またもや、その表象から抜け落ちて S_1 の場に、すなわち、 A に取り残される（従って、絵画にはいつも「枠 *cadre* (S_1 - S_2)」を縁とする穴が残される。ベラスケスの「ラス・メニーナス」のように⁸⁾）。欲動周回図は、*Bord* を成す S_1 - S_2 の間を、 a としての主体が自己の表象を得ようと運動するが、成就せず、そのまま残されることも解釈できる。

この S_1 - S_2 間の、主体の表象作用という観点について、関連すると思われるくだりを *Encore* から引こう。

[...] se dessiner la trace de ces écrits, où saisir les limites, les points d'impasse, de sans-issue, qui montrent le réel accédant au symbolique. (*Encore*, Seuil, p. 86)

拙訳：あれらの〈書かれたもの *écrits*〉という痕跡 *la trace* が、すなわち、象徴的なものに接近せんとする現実的なものを示す諸限界 *limites*、行き止まり *sans-issue* の袋小路点 *points d'impasse* をそこにこそ捉えなければならないその痕跡が、描き出されている [...]。

問題は、この引用文中の下線を引いた箇所である。ここでの「現実的なもの」は、一つ前の引用文中の「主体」に相当し、また、「象徴的なもの」は「[他者 *Autre*]の次元」に、そして、「接近せんとする」は「到達しようと試みる」に相当するとしよう⁹⁾。すると、注意をひくのは一つ目の、「現実的なもの」と「主体」との対応である。確かに、 S_1 - S_2 というシニフィアン結合において S_2 のもとに原抑圧された S_1 のもとには、 S_1 においていわば誕生した主体 (Φ のもとに自己実現した主体) が、すなわち、おそらく部分欲動の主体であるところの、フロイトの言う「快 - 自我 *Lust-Ich*」が、それ自体として（あるいは、少なくともその核を成す部分において）位置付けられるだろう。この原抑圧された部分主体は、それ自体において、象徴的なものでも想像的なものでもない以上、現実的なものである。つまり、それは、欲動の場 A として、シニフィアンによって身体に刻印され位置付けられる場に属するものである¹⁰⁾。つまり、現実的なものは、いわば、ある種の主体性を帯びていることになる。

性欲動は、そもそも、有性生殖の到来によって死の場に現れたものだが、ラカンにおいては、これが主体の分割に或る意味で重ねられた以上、言い換えれば、失われたものが、前者（有性生殖の到来、性欲動の出現）においては不死の生であったのが、後者（主体の分割）では主体の本来的な部分とされた以上、性欲動は、当然ながら、それ自体が主体の色を帯びてくるのである。

ラカンは、自我主体としての $\$$ とは別に、例えば、転移において、主体 $\$$ がいわば立ち会うところの、「無意識の主体 *sujet de l'inconscient*」ということを使う (*Télévision*, Seuil, p. 49) ののだが、こ

の「無意識の主体」が、原抑圧された、現実的なものとされる部分主体だろう。このことについて検討しておこう。

Télévision において、Jacques-Alain Miller の質問（イタリックの部分）に答えて、ラカンが次のように言う箇所がある。

- *Eh bien, que puis-je savoir ?* / - Mon discours n'admet pas la question de ce qu'on peut savoir, puisqu'il part de le supposer comme sujet de l'inconscient. (*Télévision*, Seuil, p. 58)

拙訳：それでは、私は何を知り得るか？／ 私のディスクールは、人が知り得ることを問う質問を認めません。なぜなら、私のディスクールは、その知り得ることを無意識の主体として想定することから出発するからです。

「知る savoir」とは知を成すこと、すなわち、 $S_1 \rightarrow S_2$ のことである。 S_1 - S_2 における欲動のことである。この欲動において反復されるのは S_1 である。 S_1 は、知であると、しかも、真理としての決定的な知であると想定されながらも、知ではない。 S_1 を S_2 同様の知、すなわち実在化された a であると見なそうとするのがナルシシクな欲望である。この S_1 を理想知とみなそうとすることと、 S_1 のもとに実現されていたはずの失われた主体を回復しようとするのは同じことである。つまり、人が知ろうとするそのこととは、回復しようとするその主体のことである。そして、この問題の主体を回復しようとするのと、この主体が自己を S_2 において全的に表象化しようとするのは同じことである。いや、むしろ、それが欲動である限り、つまり、 $\$$ が欲動に駆られ欲動を被っている限り、知るということの主体は無意識の主体の方なのである。欲望する存在としての人間について、厳密な意味において、すなわち、すべての行為の能動主を主体と呼ぶのであれば、「主体」とは、この、現実的なものとして、常に能動的である無意識の主体のことである。

細かいことだが、問題の主体はそもそも知り得ないものであるのに、ラカンは知ることとは言わないで「知り得ること」と言っている。これは、そもそも、知るということ、つまり、一般に知を獲得するというのが、この、 S_1 - S_2 における欲動としての「知る savoir」に拠るからである。 $\$$ から言えば、問題の主体を知ろうとして、他の知 S_2 を得るのである。他の知を得ることができるところの欲動の「知る」という意味で、「知り得る」と言うのである。

こうして、いわゆる主体の分割は、原初的なその後も、欲動の、部分欲動としての a 周回の反復毎に、新たに、おそらく初めから繰り返されるだろうという見方が可能になる。つまり、 a の浮上する毎に、言い換えれば、 A との邂逅が生じる毎に、主体の自己表象作用が欲動として生じ、主体は新たに a と $\$$ に分割される、すなわち、主体 $\$$ は「他者 Autre」の領野に新たな意味組織体として誕生する。そして、そこには欲動における享樂が、おそらく、欲動の場とシニフィアンとの境界点・限界点において、言い換えれば、欲動の「器官 organe」を成すものにおいて、生じているはずである。主体 $\$$ は、自我に同一化している限り、本質的に自体性愛的な、すなわち、ナルシシクな愛の形でしか欲動には関わろうとしない（正確には、駆られようとしない、つまり、愛の形でしか欲動を生きようとしない）。つまり、 $\$$ は、欲動の主体、無意識の主体ではない。おそらく、自我が欲動によって多かれ少なかれ消尽されたところで、 $\$$ は新たな意味のもとに欲動において誕生した自己を発見して驚くのである（芥川龍之介の「平中」の主人公のように）。

III. 転移、そして、分析家のディスクール

$$\frac{a}{S_2} \quad \frac{S}{S_1}$$

図式-1 分析家のディスクール

ラカンの言う「分析家のディスクール discours de l'analyste」の構図（図式-1）が意味するもの、そして、主体と欲動、あるいは主体と享楽の関係について検討しておこう。

分析家のディスクールの「 $a \rightarrow S$ 」の部分は転移 transfert における愛を示していると思われるが、愛と欲動との関係については、愛の深層を欲動が貫くのであり、愛は欲動に駆られた自我主体による、欲動のナルシシクな生き方、すなわち、欲望であると思われる。

欲動と自我の関係を図式化すれば、まず、欲動の運動は以下のように表せる：〈自我における欲動的欠如（ラメラ）→自我（を貫き）→ $a \rightarrow$ 自我（を貫き）→ラメラ〉。そして、自我による愛は、この行程のうちの〈自我→ $a \rightarrow$ 自我〉として捉えることができるだろう¹¹⁾。従って、分析家のディスクールの各項目の配置構図は、愛としての「 $a \rightarrow S$ 」を、その深層の「 $S_1 \rightarrow S_2$ 」が貫く関係構図として読めるだろう。

フロイトは愛について、「愛が表出しているのは快源泉としてのそれらの対象に向かう自我の動的な追求である」¹²⁾と言う。自我主体によるこの a の追求は「動的、推進的 motorisch」である。つまり、この主体の追求は欲動の a 周回を執拗に反復する。そうして自我主体が a への接近を繰り返しているとき、反復する欲動はBord（縁）を、すなわち、 S_1 - S_2 を繰り返して通っている。つまり、 $S_1 \rightarrow S_2$ を繰り返しているのである。これが、まず、分析家のディスクールにおいて示されていることだろう。

分析家に体现される「他者 Autre」は、一般に、そして、根本的に、二義的である。「他者」は根源的に $S(A)$ であると考えられるが、その二義性はこの表記自体に認められる。まず、一方では、 S すなわち、知の場としてのシニフィアン S_2 、そして、他方では、「根源的他者 Autre radical」、すなわち、その知の場 S_2 としての「他者」における欠如、落下した S_1 が拓いた根源的欠如としての、「()」で境界付けられた A である。この「()」は、二項シニフィアンとしての S_2 が、 S_1 と結合することによって、 S_1 との結合において、問題の欠如の限界 limite となってこの欠如を制定した際の、その限界のこと、すなわち、 S_1 - S_2 としての二項シニフィアン S_2 の、そのような限界・境界の機能を記号化したものだろう。我々がこのシニフィアン結合における S_2 について、 $(S_1-)S_2$ と表記する際の「()」も同じ意味である。

分析家のディスクールが示す分析の転移において、この「他者 Autre」の二義性の間で、いわば主体のポジションの、立脚点の或る転回が生じるだろう。その意味では、分析家のディスクールの構図が示す愛と欲動の重なりは、「他者」の二義性に対応するものである。

分析主体 analysant、すなわち、自我に同一化した主体 S には、その構造において、二項シニフィアン $(S_1-)S_2$ である $S(A)$ が制定されている。その意味では、主体は $S(A)$ を知っている。ただ、知っているということを知らない。この分析主体における知 $S(A)$ が、主体において、真理として「他者 Autre」に実在すると想像され、理想的な知 S_2 として、「他者」を知の場として担う分析家に転移される。それが「見せかけ semblant」としての a である。そして、自我主体 S は、この a として

の理想的な知 S_2 を、分析家が体現する「他者」の場に求め、要求 *demande* するのである。しかし、問題の、理想とされる、真理としての知は、その「他者」には存在しない。真理とは、転移において分析家が占める「他者 *Autre*」ではなく、その「他者」における欠如としての「根源的他者 *Autre radical*」、すなわち、 A という場なのであって、それ自体が知であるわけではなく、また、そこに知があるわけでもない（つまり、これは、先に触れたように、 S_1 を S_2 と見なすというナルシシクなすり替えである）。

主体は $a \rightarrow S$ において要求を繰り返すだろう。そして、分析において、ことがうまく進めば、要求が繰り返された後、主体は分析家が問題の知を持っていないことに気づくだろう。すると、分析家が担う「他者」の場に、知の存在しない A が浮上する。つまり、繰り返される要求の度に、いわばその陰で $S_1 \rightarrow S_2$ が反復されているのであり、言うなれば、この反復された各々の $S_1 \rightarrow S_2$ の先に、すなわち、 S_2 の先に、その彼岸に、真理の場としての、知の存在しない A が浮上するのである。ここに、 $S_2(A)$ の構図が出来上がる。つまり、そのとき、真理の場にあるとされていた S_2 は、この A の限界として、 $S(A)$ の価値を取り戻すことになるだろう。

一方、 $S_1 \rightarrow S_2$ の反復において、 S_1 が、この真理の場である A に再生産される。 S_1 は S_2 によって真理の場 A へと原抑圧されており、 A における欲動はこの S_1 において S_2 へと渡るのだろう。欲動の反復の各々は、実際には、 S_1-S_3 、 $S_1-S_4...$ のように個別の在り方をするだろうが、この反復は、まさしく S_1 の反復生産、反復的参照である。そして、 S_3 、 $S_4...$ は、すべて、同等に、類似のものとして（しかし、それらが背後において繋がる S_1 以外に共通項のない、個々に異なるものとして） S_2 の場に位置付けられる。すなわち、これらの反復はすべて、 $(S_1-)S_2$ の反復であり、この反復において、欲動として現実に反復生産・反復参照されているのは S_1 なのである。対象を数える際に、現実に反復されているのが S_1 への参照であるように¹³⁾。そして、それが二項シニフィアン $S(A)$ における反復的享樂なのである。

こうして、 a として真理の場 (A) に追求されていた知 S_2 が $S(A)$ になる。つまり、主体が知っていることを知らない知である $S(A)$ が、分析家への転移を介して、主体自身の構造内に本来の位置を占めるに至るのである。言い換えれば、主体 S が、構造内において、欠如のない「他者 *Autre*」への要求から、その「他者」における欠如 A の印としての $S(A)$ における欲動へと、自己のポジションを転回させるのである。

更に付言すれば、分析家のディスクールにおける S_1-S_2 反復の末の A の現れとは、「他者 *Autre*」であった分析家が、その A を内包する「他者 *Autre*」として現れること、すなわち、 S_2 が、 A を内包するところの $S(A)$ であること、すなわち、 $(S_1-)S_2$ における S_2 であることの現れであるだろう。この問題の焦点は、根本的に、 $S(A)$ における、 A のそれ自体としての現れと、主体によるその承認にある。

ただし、これは分析家のディスクールの構図が示す理論的な理屈である。実際には、このことは主体に、漠然として捉えがたいが、しかし、ある具体性を備えた、そして、遅かれ早かれ、ことりと腑に落ちる主観的な出来事として経験されるに違いない。それはおそらく、ある欠如の感覚、ある底なしの淵の感覚、そして、その淵から何かを汲み取ろうとする無意味で反復的な営みの際限のなさの感覚だろう。しかし、それは、絶望感ではなく、むしろ、無意味なこと、汲み尽くせないことを楽しむ感覚、言い換えれば、意味を超えた、涸れることのない淵あるいは泉の感覚であるだろう。これは自我主体における享樂の問題である。

先に、欲動の反復において、まず享樂するのは $S(A)$ であると言った。では主体の享樂はどうなるのだろうか。

自我に同一化した主体の実質は、分割において誕生した S だろう。 S が自我に同一化して自我主体となるのだが、それでも、自我主体は、その根本において相変わらず S であり続けるだろう。そして、自我主体は S における、すなわち、分割現場における自己反復による享樂を、すなわち、 $S(A)$ における享樂を知らない、言い換えれば、知っているということを知らない。

ラカンの言う JA 、すなわち、「他者」の享樂 *jouissance de l'Autre* の「他者 *Autre*」とは A 、つまり、「他者」における欠如としての「根源的他者 *Autre radical*」であり、従って、「他者の享樂」とは、 $S(A)$ としての「他者 *Autre*」の享樂だろう。また、シニフィアンの享樂と言う場合 (*Encore*)、それは S_1 ではなく、この $S(A)$ としての S_2 のことだろう。ラカンの言う「女の享樂」における $S(A)$ である。

$S(A)$ が S_2 、すなわち、二項シニフィアンのことであれば、それは S_1 - S_2 を指すことになる。つまり、先にも触れたことだが、 A を、そこに S_1 が原抑圧された場として、 (S_1-) と表記すれば、 $S(A)$ とは $(S_1-)S_2$ のことになる。つまり、 $S(A)$ とは、そこを、主体を表象しながら欲動が通るところの *Vorstellungsrepräsentanz*、すなわち、欲動としての主体の表象作用 *représentation* の、その代表 *représentant* なのである。つまり、 JA とは、この S_1 - S_2 における欲動の享樂のことである。そして、 S_1 - S_2 が、Fig. XV-2 におけるように、 S にとって彼岸と此岸をまたいでいる限り、あるいは、両境界の境界線を成す限り、また、そうしてそこに蠢く欲動が、フロイトの言うように、心身の「境界概念 *Grenzbegriff*」¹⁴⁾ としてその境界線上に位置する限り、すなわち、この境界線自体が器官として享樂する限り、此岸にいる主体 S は、この欲動の享樂を何らかの形で共に出来るだろう。

実際、愛も幻想も性倒錯も、自我主体 S が欲動を自分なりの仕方でき、享樂するところの、その仕方なのである。「献身 *oblativité*」(231) のひとつである、ボランティア等のいわゆる社会奉仕についても、やはりそうだろう（この場合、「他者 *Autre*」は、自我主体の犠牲を享樂する某かの「社会」という、不特定の他者たち *autres* に格下げされている）。要するに、先に愛について挙げた図式、〈自我における欲動的欠如 (ラメラ) → 自我 (を貫き) → a → 自我 (を貫き) → ラメラ〉に示されるように、自我主体は欲動の周回運動に貫かれ駆られながら、言わばそれに乗る形で、他人 *autre* を相手に某かの演技を工夫しながら、自分なりに享樂するのである。従って、問題は、どのような仕方でき享樂するのかということだろう。

死と性欲動という欠如 A を負った、欲望する存在としての人間の享樂である。最終的に、享樂するのは $S(A)$ であるが、人間の倫理としての享樂は、自我を貫く欲動による自我消尽の果てに、いわば裸形の主体 S が、この $S(A)$ の享樂を共に享樂することにあるだろう。分析家のディスクールはそのことを示しているだろう。すなわち、 A の「承認 *reconnaissance*」である。

Télévision においてラカンは次のように言う。これは以前にも他の場所で引用したものだが、非常に示唆に富んでおり、何度でも参照すべき文言であるため、もう一度ここに引こう。

Le sujet est heureux. C'est même sa définition puisqu'il ne peut rien devoir qu'à l'heur, à la fortune autrement dit, et que tout heur lui est bon pour ce qui le maintient, soit pour qu'il se répète. (*Télévision*, Seuil, p. 40).

拙訳: 主体は幸せ／運の人 *heureux* なのです。それは 主体の定義 でさえあります。と言うのも、

主体は運 *heur* にしか、言い換えれば、運命 fortune にしか、どんな義務も負うことはあり得ないからです。そしてまた、どんな運も、主体を維持するもののためには、すなわち、主体が自らを繰り返すためには、主体にとって好いものだからです。

ここでの「主体」とは、まず、先ほど問題にした、現実的なものとしての無意識の主体である。この主体は自己反復する限り、幸福なのである（つまり、そこには享楽がある）。この主体は、どんな運であろうと、偶然、それに邂逅する度に、言い換えれば、現実的なものの領野であるAが開閉する度に、そこに現れ自己反復するものであるため、運 *heur* の人（人と言うより、むしろ、主体だが）として幸福 *heureux* であることがその定義になるのである。また、この主体は、自身が現実的なものとしてAに属するものであるため、Aの開閉としての運との邂逅においてしか存在しない。だから、主体は、運との邂逅に対して、その都度、自己反復の義務があるものの、運に対する以外にはどんな義務も負いようがないのである。

しかし、「義務を負う *devoir*」というのは倫理のことだろう。つまり、この主体があらゆる運に対して義務を負うというのは、あらゆる運について、それとの邂逅を自ら「邂逅 *rencontre*」とすること、言い換えれば、その邂逅を、口を開いたAとして受容し、そこで自己反復する、そうして享楽するということだろう。そして、無意識の主体が、自らAとの邂逅を積極的に受容するという、「義務」という語にまつわる一見奇妙な言い回しが意味するのは、我々自我主体における倫理の根源が、この水準に、この無意識の主体における享楽と共に位置づけられるということだろう。このことが意味するのは、自我における欠如、すなわち、傷（外傷）を意味するAとの邂逅において、我々自我主体がこの邂逅からどれほど目を逸らそうとも、無意識の主体はすでに自己反復し享楽しているということ、そして、我々の倫理的義務は、我々自身がこの主体とともにあること、すなわち、この主体の自己反復に立ち会い、その享楽を共にすることに存するということである。

引用文中の「運命 *fortune*」は、古代ローマ神話の豊穡多産の女神フォルトゥナへの暗示である。このフォルトゥナは、後にギリシア神話の運命の女神テュケーと同一視されたい（『仏和大辞典』に拠る）。そして、テュケーについて、ラカンが「現実的なものとの邂逅 *rencontre du réel*」(61) であると説明している。つまり、無意識の主体の自己反復に乗る形で、自我主体Sが、現実的なものの中であるAとの偶然の邂逅・巡り合わせにおいて自己反復することは、「豊穡多産」なのである。欲動の周回図はこの真理を示唆しているだろう。また、この、欲動による自我の消尽・崩壊を招く邂逅こそがドラマであり、演劇はこれを表現しようとするのだろう。

そして、欲動周回において、そのように自我が消尽・崩壊した後に、Sは、直前までの自我と異なる、ある意味においてそれと断絶した、新たな意味組織体としての自己が再生されるのを認めるだろう。つまり、Sが身の崩壊を伴うドラマと邂逅するとき、無意識の主体はAと邂逅しており、そこからaを巡る周回反復をするのである。そして、その欲動水準における周回反復がある限り、崩壊の危機の最中で苦しむ自我主体は、実はその起源の水準において、その深層において、欲動の主体の周回反復に支えられて同時に反復するSとして、「幸福 *heureux*」である、すなわち、Aにおいて、「好運 *bon-heur*」という「現実的なものとの邂逅 *rencontre du réel*」における欲動の周回反復において、aへの仮説として、賭けとして存在する主体Sが幸福なのである。

不運のどん底にいる人間が立ち直る力を汲み取るのも、おそらくそこから、すなわち、自我が消

尽されて何者でもなくなったその灰燼の中に、いつもと変わらず自ずと動き出して、ただ黙々とそれ自身を反復するのが感じられるもの——欲動だが、しばしば動植物など、自然的反復をする自然のもの、あるいは、(小津安二郎の作品にしばしば用いられる、風にひらめく洗濯物のシーンのように) 日常生活の単純で反復的な営みなど、それ自体において無意味に反復するものに投射される——からだろう。つまり、 S が反復できるのは、欲動が周回反復するからであり、また欲動が反復できるのは、往還の間に「異質性 *hétérogénéité*」(229)があるから、そこに A があるからである。研究・芸術という創造行為(主体表象の行為)、つまり、一般に、思索するということ(これらすべてが $S_1 \rightarrow S_2$ である)は、そこに自我の消尽がある限り、やはり同じことが言える。このとき、自我主体は苦しむだろうが、同時に、そこには、侍従に焦がれ死にする平中におけるように、言い知れぬ充実感があるだろう(平中の場合には、この充実感、すなわち享樂が、 S において実感されるのは東の間で、 S は自我の消尽の苦痛に耐えきれず、享樂は結局、「他者 *Autre*」としての侍従に投射される、あるいは、戻される。そして、そこで、まさしく、自我を苦しめる「他者の享樂」になっている。筥の蓋を開けるか否か躊躇するという、芥川龍之介「平中」のクライマックスを参照されたい)。

IV. おしまいに：「古池や…」

この論考のおしまいに、これまで述べてきたことのまとめの代わりとして、ひとつ、俳句を用いて、自我主体による欲動周回の体験、すなわち、欲動周回と共に享樂する体験を粗描してみようと思う。

取り挙げるのは、遍く知られた芭蕉の句、「古池や蛙飛びこむ水の音」である。先に検討した「現実的なものとの邂逅」において、「無意識の裂開 *béance de l'inconscient*」の開閉が生じたときの体験である。ここでのその A との邂逅は、ドラマというほどのものではなく、むしろ日常に近い開きであり、従って、自我の消尽は際だったものではないのだが、それでも、この本質はそこに認めることができるだろう。

ここでの目論見は、一句の俳句との出逢いを、ラカンの言う主体の、シニフィアン S_1 - S_2 との邂逅における分割の出来事をもって解釈することである。

私がこの句を読む場合のこと。例えば、漠然としたとりとめのない思いに耽っているとき、ふと「古池や」(S_2)が目に入る。私はひとと立ち止まる。注意がそこに集中する。何ものでもなかった私が、 S_2 という形を得る。そのとき、「蛙飛びこむ水の音」(S_3)が眼を介して耳を打つ。すると、そこで何かが起きる。

S_3 の現れと同時に、たちまち、ひとつの光景がその臨場感とともに湧き出て広がる。眼の前に、生い茂る草木に縁取られた古池が横たわり、たった今、蛙が水草のあいまの水に飛び込む音がしたと思うと、再び、いや、その前にもまして一層深みを帯びた、まったく新しい静寂が支配する。この忽然と湧き出た生々しい光景、静寂に打たれた古池の臨場感が、 S_2 が S_3 と繋がることでそこに生じた、何ものかを指し示すひとつの方向性 *sens*、すなわち「意味 *sens*」である。しかし、この方向性としての意味を現実には産み出したのは、互いに同水準にある S_2 - S_3 ではない。それは、その方向性とその先に指し示す何ものかである。意味は水準に対して水平方向には生じない。意味を産み出すのはシニフィアン網の中核としての S_1 、すなわち、シニフィアン網(場としての S_2)をその

中心となって支える中心点（シニフィアンとしての S_2 ）のもとに他なる水準へと落下してそのシニフィアン網の不在の「魅惑点」となった S_1 であり、ここでの古池の句にまつわる意味は、 S_2 を介した S_1 - S_3 という、 S_2 の水準に対する垂直の方向性によって決定され産み出されているだろう¹⁵⁾。つまり、このとき、 S_2 - S_3 の結合において現実には起きているのは S_1 - S_2 である。

私は、このとき、古池の畔に佇む臨場感という意味として表出、「表象 *représentation*」されている。つまり、私は (S_1 -) S_3 に「同一化する」、「シニフィアンとして凝固する *se figer en signifiant*」。言い換えれば、 S_1 - S_2 という「枠 *cadre*」の、その彼岸からやって来る「視線 *regard*」によって、古池の畔という一枚の「絵 *tableau*」として描き出されている。これが、 S_1 - S_2 によって拓かれたシニフィアンの網の目としての領野、すなわち「[他者]の領野 *champ de l'Autre*」における、その都度の意味的な主体 \mathcal{S} 、すなわち、自我としての主体の在り方だろう。

この臨場感は、 S_1 - S_2 から湧出すると同時に、眼の前に広がった光景の、その奥まったどこかに、何かの気配を感じさせる（意味としての私 \mathcal{S} は、 S_2 が S_3 に結びついた際に、言い換えれば、 S_1 - S_2 が開いた際に、 a という欲動的欠如を負っている。それは、この光景の全体をその深奥から支配・統括する静けさに似ている）。私はそれが何なのか、神経を集中させ捉えようとするが、それは、古い記憶や想念の切れ端をいくつか呼び起こしかけたまま、ただ余韻だけを残して、古池の臨場感とともに薄れて消えてしまう。

この何ものかは、私というその時々絵の各々において、その画幅の全体から欠落することでそれをひとつの組織体として描き出すと同時に、そのように描き出されたすべての絵を一挙に編成・統括するところの、それらに共通した中枢としての欠落点である。つまり、これら個々の絵・意味は、 S_1 の代理である、意味の源泉としての a からその実質を得ている（ a は、その意味的な絵の背後の、落下した S_1 がそこに位置付けられる「無意味 *non-sens*」の代理でしかない）。

\mathcal{S} は a との関係においてしか、主体として真に問題になることはないだろう。言い換えれば、被りものである自我の消尽に曝されなければ、原初の分割における自らの出自を自問することはないだろう。この主体は、通常、自我に同一化して、自我として「パロール *parole*」水準に生活していると考えられる。そして、折に触れて、「無意識の裂開 *béance*」が開いて S_1 - S_2 が反復されたとき、自己の新たな在り方（新たな意味としての自我）の現れに驚くとともに、裂開の場に現れた（現れなかった） a を周回してもとの裂開の「縁 *bord*」に戻る（つまり、縁の一端 S_1 から出て他端 S_2 へ戻る）ところの欲動と、この欲動周回における享樂を、自己において新たに湧出した、 a という欲動的な欠如を負った意味として、あるいは、この意味の生産の反復として経験するのだろう。

作者の芭蕉においても、予期しない S_1 - S_2 の再開において突然出現した、欲動的欠如へと深奥に向かって収斂する新しい意味に自己を奪われたからこそ、この句を物したのである。欲動周回が閉じた後、事後的に S_2 と S_3 を見つけ出し（欲動周回、すなわち、無意識の裂開の開閉は、ラカンが言うように、二つのシニフィアン結合による二拍子を成す。この句はこの二つの拍を捉えている）、それらをもってその意味を定着させることによって、その意味に欠けたもの、すなわち、「無意味」を捉えようとしたのである。そして、生涯、これとまったく同じことを、一句、また一句と繰り返したのである。その都度、意味の背後に退き続けるものこそが、驚きという形を取った享樂とともに、意味を産み出すことを承知していたから、言い換えれば、その何ものかが退き続けること自体がそれであるところの、この享樂的反復を可能にしている A を承認していたからである。

注

- 1) Jacques Lacan, S. XI *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, AFI, p. 257. イタリック強調はラカン、そして、下線強調は筆者。また、拙訳中の[]内は筆者の解釈・註釈である。以下同様。以降、S. XIの参照テキストとしては、このAFI版を用いる(図版もそこから借用する)。この版はネット上で公開されている(*École lacanienne de psychanalyse*のホームページ参照)。また、以降、当該著作の当該版からの引用については、その参照箇所を引用文の末尾にページのみで記す。
- 2) この大文字のAを用いたAutreについては、以下、「他者」と「」を付けて表記する。
- 3) 「無意味 le non-sens」については、本注釈欄下方のFig. XVI-2 (246) 参照。
- 4) ラプランシュ／ポンタリス『精神分析用語辞典』、みすず書房。
- 5) ちなみに、岩波版フロイト全集の「抑圧」(前掲の用語辞典の著者が、原抑圧についてのくだりをこの著作から引いている)では、「表象の代理」と訳されている。
- 6) 拙論、「自我と欲動」、明星大学人文学部研究紀要、no. 51、2015年。
- 7) 筆者がここに、訳として「シニフィアンとして」を付加したのは、「凝固する se figer」の前に、「成る devenir」という動詞が使われているからである。
- 8) 「ラス・メニーナス」については、ラカンの考察がある(*Séminaire XIII, L'Objet de la Psychanalyse*)。また、筆者は、この考察について、拙論において論考した(「ラカンの「ラス・メニーナス」論を巡って」、『ジャック・ラカン研究』、no. 5、日本ラカン協会)。
- 9) 対応するものは他にもある。周回図における欲動の回帰運動は、いわゆる「迂回 contour」だが、この引用文中の「諸限界、行き止まりの袋小路点」とは、このaの迂回が形成する痕跡である。つまり、双方において、迂回が示唆されている。
- 10) そもそも、「主体」が、Aにおける主体であることは、「疎外 aliénation」の図 (Fig. XVI-2, p. 246) から明らかである。我々はこの図の「意味 Le sens (「他者」 l'Autre)」の領野にいたるのだが、この領野にはそこから欠けた(そこからΦとして「除角された écorné」)領野として「無意味 le non-sens」のそれがある。そして、我々にとって、「存在 L'être (主体 le sujet)」はその「無意味」の中に位置付けられるのである。
- 11) このことは、拙論「自我と欲動」(前掲)において、下の図をもって示した。この図は、筆者が幻想・性倒錯を検討するために、ラカンがS. XIにおいて示した欲動のa周回図に自我の愛の運動を重ねたものである。

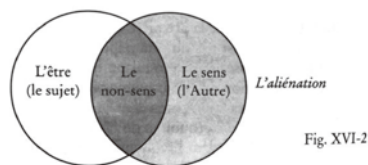


Fig. XVI-2

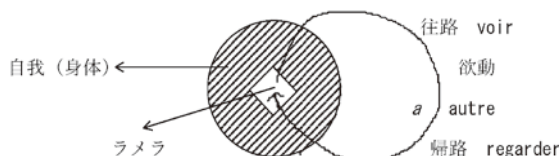


図-1 自我と欲動の図

- 12) フロイト、「欲動と欲動運命」(1915年)、『フロイト全集』、第14巻、岩波書店、p. 191。
- 13) 付言しておけば、S₂水準上の個々の対象、例えば、ドン・ファンにとっての個々の女たちには、皆がS₁を、すなわちAを備えているということの他に、数えることが出来るための共通点はない。拙論「S₁について」において、筆者は、ラカンが*Encore*において言及しているドン・ファンに関してこの問題を扱った。明星大学全学共通教育研究紀要、no. 3、2021年。
- 14) フロイト、前掲書、p. 172。
- 15) 水平・垂直については、Fig. XV-2を参照されたい。ただし、ここで言う水平・垂直は図の二つの線と逆になる。